

控え室の扉が開いた。

俺の許可を待たずともなく中へ入ってきたのは、俺やイレミアスと同じ東の收容所所属の勇者、ランプレヒトだった。こいつは武闘祭に参加している、おまけに本選にも残っていやがる。おおかた盤外戦をしかけにきたか、もしくは単なる嫌がらせにきたんだろう。

「あ、何てめえ勝手に入ってきてんだよ。人の部屋に入る時はノックしなさいってママに教わらなかったか？」

俺は最初からケンカ腰だ。

ランプレヒトは、部屋にイレミアスがいるのに気づいてやや驚いた様子をみせたが、すぐに調子を取り戻した。イレミアスが俺とつるんでいるのは珍しいことじゃなかったのだ。

「は？、ノックウ？おまえがそんな上品な玉かよ。それともあれか、ナーバスになっちゃってんのか、試合が怖いよくてなもんか」

ランプレヒトは整った顔をゆがませていった。金髪に碧眼、彫りが深く高い鼻梁、まあまあ美男子だが、そのハンサムガイぶりが鼻につく。一言でいうならランプレヒトは中途半端な美形だった。

また、その中途半端具合がムカつく。いや、本当にムカつく顔だ。こいつは人をムカつかせることにかけては天才的だな。大体、俺と年がそうは変わらないおっさんの癖して、何スカしてやがんだ。

ランプレヒトは俺やイレミアスとは違い、大団円型の勇者だ。悲劇型とは違い、ハッピーエンドで話を終えるタイプの勇者だ。大団円型勇者のもとには、彼を慕い仲間が集う。その仲間たちと力を合わせ、悪を滅ぼし、めでたしめでたしで終わるのが大団円型である。能力は悲劇型と比べると劣る（それでも普通の人間より段違いに強い）が、それを埋め合わせるように人望と強運を持っている。魔王を倒す旅の途上で出会う仲間や勇者を導く人々、これらは偶然にあられたように見えるが、それらを呼び寄せたのは他ならぬ勇者自身の強運なのである。

この大団円型勇者は魔王を倒した後、そのまま、国を興すケースが多い。確か、三大国の内、サウニアルはその始祖は勇者であった

はずだ。

本来は人望あるはずの大団円型勇者だが、目の前のこいつ、ランプレヒトは例外だ。その口と根性の悪さが災いして、収容所内でも鼻つまみものとして通っている。収容所内の非公式アンケートでは、こいつは友達になりたくない部門で毎回、堂々の二位を記録している。ま、万年二位の俺もたいがいだが。

いつもなら舌戦に終始するところなんだが、俺も脱走を控え気が立っていた。

胸倉をつかみ恫喝した。

「死にてえのか、コラ」

「んだ、やんのか」

ランプレヒトも返す。しかし、こりやチンピラのケンカだな。我ながら勇者とは思えん。

まあまあ、とイレミアスが間に入った。勇者の中の勇者に仲裁されては、引き下がるしかない。俺もランプレヒトも拳をおさめた。

イレミアスは俺とランプレヒトに無邪気な笑顔を浮かべた。

「友達になりたくない部門一位と二位がケンカすることもないよ。どうせ友達いない同士なんだし、仲良くしたらどうだい？」

これには、俺とランプレヒトも口を揃えていった。

「三位のおまえがいうな！」